

# グローバル化に対する大学生のモチベーションに影響を与える要因とモチベーションを高めるシステム設計についての研究

Study on the factors that affect university students' motivation for the globalization, and on the system design to increase their motivation

平林 信隆

Nobutaka HIRABAYASHI

## 概要

本研究の目的は今日のグローバル化の中で外国人の顧客やパートナーと共に働く将来の仕事に対して大学生が持つモチベーションに影響を与える人の属性や要因についての仮説を立案し、大学生 319 名を対象にした調査と分析を通じて仮説の信憑性を確認するために行ったものである。この調査で日本人学生の約 56% が将来の仕事について外国人の顧客またはビジネスパートナーと一緒に働きたいというモチベーションを持ち、約 50% が在学中の海外滞在を希望していることがわかった。グローバル化への高いモチベーションを持つ学生の人の属性の特徴として、「主体的に行動する」、「目的を達成することに重きを置く」、「自分の中にある判断基準に基づいて決定を下す」、「プロセスやスケジュールに従って行動する」という 4 つの心理的な傾向が統計的に確認された。さらにはグローバル化へのモチベーションを高める人の属性や要因を抽出し、学生のモチベーションを高める大学のシステムの設計についての考察を行った。

キーワード：グローバルモチベーション分析, グローバル行動分析, グローバル大学教育

## Abstract

The purpose of this study is to formulate a hypothesis about the attributes of people and factors that influence the motivation for university students' future works with foreign customers and partners in recent globalization, and to confirm the credibility of the hypothesis through survey and analysis for 319 university students. In this survey, approximately 56% of Japanese students have the motivations for their future works with foreign customers and partners, and about 50% wish to stay overseas while they are students. It is confirmed that attributes of students with high motivation to globalization characterize four psychological tendencies, "behaving pro-actively", "putting emphasis on achieving the purpose", "deciding based on judging criteria among themselves", and "acting in accordance to process and schedule". By extracting the attributes of people and factors that increase the motivation for globalization, the design of the university system which motivates students was discussed.

**Keywords:** Global Motivation Analysis, Global Behavior Analysis, Global University Education

## 1. はじめに

今日の世界情勢においては米国や欧州で自国優先主義に基づくポピュリズムや保護主義などのイデオロギーが生じているが、交通手段の発達や情報手段、特にインターネットの発達により世界は確実に狭く、近

くなってきている。この世界におけるグローバル化の流れの中で大学生にとって、政治的にも、経済的にも、教育的にも、世界に通用する多様性を身に着けることが不可欠である。

さらに2020年の東京オリンピック開催に向けて、日本のような単一的な国家ですら、訪日外国人観光客数は2015年に1974万人、2016年に2403万人、2017年に2869万人となり、前年比19.3%増の過去最多となった(日本政府観光局2018)。日本政府の目標が2020年に4千万人、2030年に6千万人(国土交通省観光庁観光ビジョン2016)と日本の総人口の約半分の外国人が訪日する時代が近づいている。日本国内においてもグローバル化は確実に進んでおり、大学生が外国人との多文化共生をしていくことはますます重要になっていくのである。

このように日本にとって、グローバル化は機会であり避けられないテーマでもある。本研究では学生がグローバル化の中で外国人の顧客やパートナーと共に働く将来の仕事への動機付けをモチベーションと規定し、モチベーションに影響を与える心理的な属性や要因について仮説モデルを立て、学生の対象者319名の調査と分析を通じて仮説モデルの信憑性を確認し、大学においてモチベーションを高めることに有効となりうるシステムの設計に関しての考察を行うことにした。

## 2. 本研究の仮説モデル

### 2.1 先行研究におけるモチベーションモデル

Likert, R. (1961) は原因変数(組織システム)が仲介変数をへて結果変数(組織業績)に影響を及ぼすという基本的フレームワークに基づいてモデルを構築している。この場合の仲介変数とは「組織の内部状態および健康度」であり、上司への態度、コミュニケーションの良好度、集団への帰属意識などによって生じる仕事へのモチベーションの強さの尺度と解釈することができる。従ってLikertのモデルは図1のような仕事へのモチベーションモデルになる。Likertは集団的決定を同一型モチベーションを高め、ひいては組織業績を高めるメカニズムとして重視している。

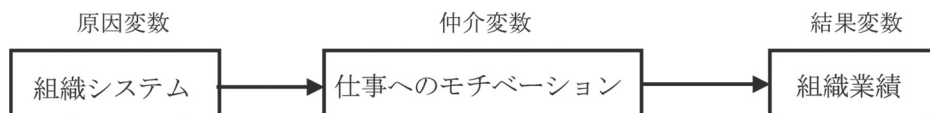


図1 Likertの基本的フレームワーク

図2はモチベーションの期待理論である。期待理論において、モチベーションの強さは「期待(expectancy)」と「価値(value)」の積に相当する。

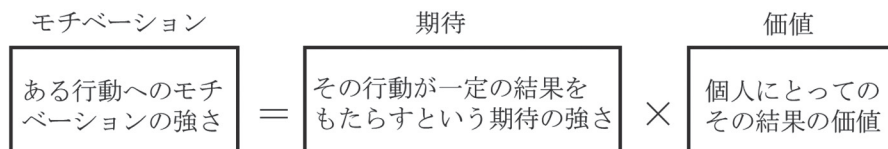


図2 モチベーションの期待理論

Litwin & Stringer (1968) の研究における組織風土の概念は組織メンバーによって知覚される環境が組織システムの要因とモチベーション傾向との間を仲介する媒介変数として用いられる。この理論をLitwin & Stringerの統合理論と呼び、その基本的なフレームワークは図3のようなものである。

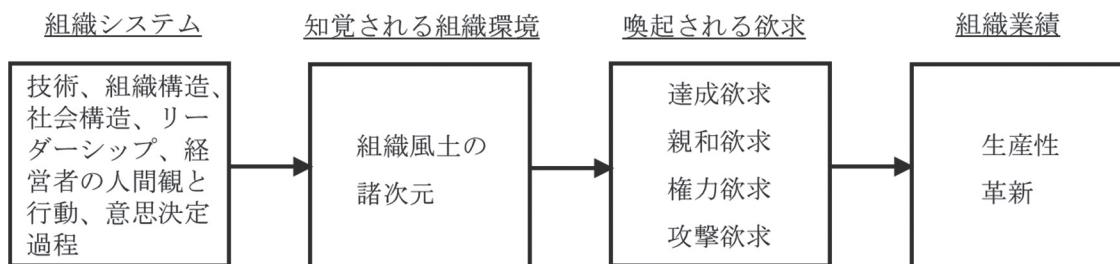


図3 Litwin & Stringer の統合理論のフレームワーク

Likert や Litwin & Stringer の研究はともに心理学的モチベーションにおける期待理論を組織的モチベーション理論まで展開した点においては大きな意義をもっている。しかしながら、部門・集団との同一化によって生じる同一化のみをモデルの中に組み込んでおり、個人属性についての検討が十分になされていないことが課題である。

K. Briggs & I. Myers (1962) は C. G. Jung (1921) の心理学的タイプ論 (Psychological Type) をベースに MIBT (Myers-Briggs Type Indicator) を開発した。Pearman & Albritton は MIBT の各タイプごとの動機づけの特徴について分析をしている。MIBT は個人属性とモチベーションの関係、すなわちタイプという個人それぞれに固有な経験や考え方の構造を知るための手がかりを提供してくれるのであるが、同時に、タイプが人間の行動に影響を与える多くの要因のひとつにすぎないことも理解しておく必要がある。

C. G. Jung (1921) の心理学的タイプ論 (Psychological Type) のもう一つの発展形として Rodger Bailey が開発し、S. Charvet (1995) が全世界に向けて普及をした The Language and Behavior Profile (LAB Profile) がある。LAB Profile はモチベーションに影響を与える動機付けの特徴となる6のカテゴリーとパフォーマンスに影響を与える行動上の特徴となる8つのカテゴリーからなる。表1は動機付けの特徴となる6つのカテゴリーの中で特に個人属性とモチベーションとの関係を理解する上で重要な4つのカテゴリーである。各カテゴリーは対象者が好んで使う言葉のパターンより構成されている。対象者の好む言葉を分析し、どのパターンに属するかプロファイリングする。人がある状況の下で、その人が持つパターンを言葉に寄り刺激することでモチベーションが高まり、維持することができる。異なる状況の下では同じ人でも持つパターンが変容する。Godin & Siros (1995) は LAB Profile の統計的信頼性に関して、「職業を決定する」という状況の下で84名がインタビューを行った。Choen (1986) のカッパ係数を用いて LAB Profile が「方向性」、「判断基準」、「選択理由」を含む10カテゴリーで統計的信頼性を満たす数値が認められたが「主体性」のカテゴリーでは統計的信頼性を示す結果は得られなかった。

表1 Roger Bailey の動機付けの特徴となるカテゴリー

カテゴリー	パターン	定義 (対象者に好む言葉)
主体性	主体行動型	すぐに行動に移す。主体的に行動してから考える。
	反映分析型	物事をじっくり考え、状況を理解してから行動に移す。
方向性	目的志向型	目標を達成することに焦点が置かれる。
	問題回避型	問題を発見し、回避し、解決する能力が優れている。
判断基準	内的基準型	自分の中に判断基準があり、自分で決定したいと考える。
	外的基準型	周りからのアドバイスを尊重し、周りに人に判断を委ねる。
選択理由	オプション型	絶えず新しい方法や別の選択肢を見つけ出そうとする。
	プロセス型	既存のプロセスやスケジュールに沿って仕事をするのが得意。

(シェリー・ローズ・シャーベイ 『「影響言語」で人を動かす』, 実務教育出版, 2010 をもとに筆者が加筆修正)

LAB Profile は人事・組織などの HR を中心にビジネスや教育の分野で広範に採用されている。ビジネスの分野ではエア・カナダ、アンダーセン・コンサルティング、ベル・カナダ、ザ・ボディショップ、フィラ

デルフィア連邦準備銀行, IBM ヨーロッパ, マイクロソフトなどがある。政府団体においてはフィンランド銀行, フランス銀行, カナダ国防省, 欧州委員会 (ブリュッセル), 欧州議会 (ルクセンブルグ), フィンランド外務省, ユネスコ (パリ), 教育分野においてもヘルシンキ大学, トロント大学などへの採用実績がある。

## 2.2 本研究の仮説モデル

本研究の仮説モデルを立てるにあたり, 最初に図4に示す2つの仮説モデルについて検討を行った。モデル1は Pavlov, I. の古典的条件づけ, Watson, J. B. の S-R 心理学, Thorndike, E.L. の効果の法則などの行動主義の理論に該当する。モデル2は Hull, C.L. による S-O-R 理論などの新行動主義や Skinner, B.F. のレスポナントとオペラントという概念を取り入れた行動分析学が当てはまる。

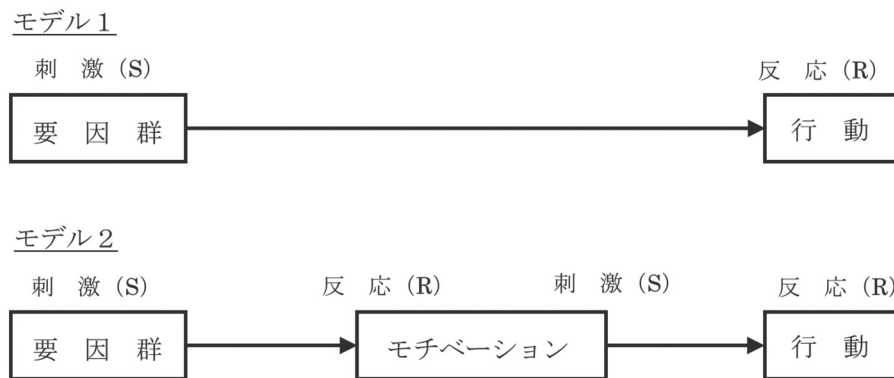


図4 大学生のグローバル化についての要因群とモチベーションおよび行動の関係

モデル1, モデル2をさらに発展させたものが図5に示すモデル3であり, 本研究の調査・分析のための基本モデルとなる。このモデルは「人はモチベーションを持ち, 要因群の刺激を受けて反応するが, その反応の仕方は人の属性によって影響される。LAB Profile の4つのカテゴリー (主体性, 方向性, 判断基準, 選択理由) が人の属性とモチベーションの間に介在し, 行動に影響を与える。」という仮説から成り立つ。

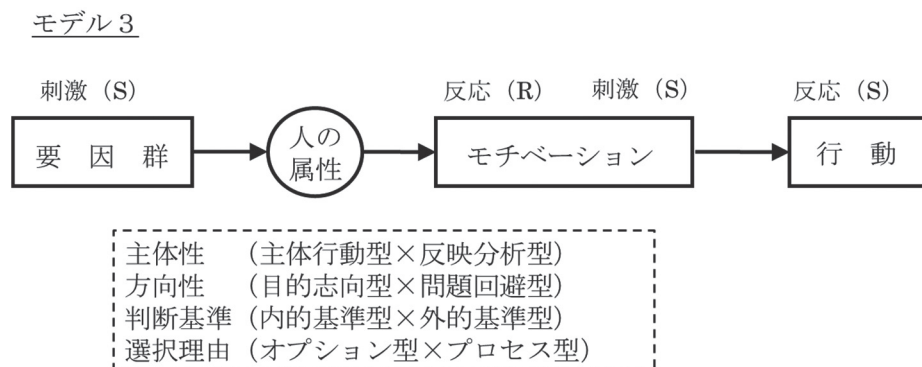


図5 本研究の調査・分析の基本モデル

また, 学生のグローバル化に対するモチベーションを「将来の仕事について外国人の顧客またはビジネスパートナーと一緒に働きたいという気持ちの強さ」と定義し, 表2に本調査における仮説を一覧にまとめた。その中でも LAB Profile の4つのカテゴリーに関しては主体性 (H0, H1), 方向性 (H2, H3), 判断基準 (H4, H5), 選択理由 (H6, H7) のように表2の各々の仮説が対応することになる。

表2 仮説一覧表

仮説	内 容
H0	帰無仮説 グローバル化において主体行動型と反映分析型の学生の外国人と働きたいというモチベーションに違いがある
H1	対立仮説 グローバル化において主体行動型と反映分析型の学生の外国人と働きたいというモチベーションに違いはない
H2	帰無仮説 グローバル化において目的志向型と問題回避型の学生の外国人と働きたいというモチベーションに違いがある
H3	対立仮説 グローバル化において目的志向型と問題回避型の学生の外国人と働きたいというモチベーションに違いはない
H4	帰無仮説 グローバル化において内的基準型と外的基準型の学生の外国人と働きたいというモチベーションに違いがある
H5	対立仮説 グローバル化において内的基準型と外的基準型の学生の外国人と働きたいというモチベーションに違いはない
H6	帰無仮説 グローバル化においてプロセス型とオプション型の学生の外国人と働きたいというモチベーションに違いがある
H7	対立仮説 グローバル化においてプロセス型とオプション型の学生の外国人と働きたいというモチベーションに違いはない
H8	帰無仮説 グローバル化において海外経験者と未経験者の学生の外国人と働きたいというモチベーションに違いがある
H9	対立仮説 グローバル化において海外経験者と未経験者の学生の外国人と働きたいというモチベーションに違いはない
H10	帰無仮説 在学中に海外滞在を希望する学生と希望しない学生の間には外国人と働きたいというモチベーションに違いがある
H11	対立仮説 在学中に海外滞在を希望する学生と希望しない学生の間には外国人と働きたいというモチベーションに違いはない
H12	帰無仮説 海外滞在の有無と在学中の海外滞在の希望には関係がある
H13	対立仮説 海外滞在の有無と在学中の海外滞在の希望には関係がない

### 3. 調査と分析

#### 3.1 調査対象

共栄大学国際経営学部の IT, 英語, スポーツ, 多文化関連の授業を履修した学生に対して 2017 年 7 月から 9 月にかけて調査を実施した。回答者数は 319 名, 有効回答数は 300 名, 有効回答率は 94%であった。また, 調査を実施した科目を同一の学生が複数履修し, 本調査に重複して回答することを避けるため, 質問紙に「既に記入済みのチェック欄」を設け, 「学籍番号」, 「氏名」で重複がある場合は最初の回答を採択した。有効回答者の内訳については表 3 に示す。

表3 有効回答者の内訳

学年	人数	割合	性別	人数	割合	国籍	人数	割合
1年生	154	51%	女性	78	26%	日本人	268	89%
2年生	72	24%	男性	222	74%	留学生	32	11%
3年生	47	16%	合計	300		合計	300	
4年生	27	9%						
合計	300							

#### 3.2 調査項目

本研究の調査に使用した質問紙の内容を以下に示す。図 5 の本研究の調査・分析の基本モデルに規定した LAB Profile の 4 つのカテゴリ（主体性, 方向性, 判断基準, 選択理由）に関する項目は Q4 で調査をした。

Q1 これまでのあなたの海外経験を選んでください（海外滞在経験がない場合は Q3 より回答して下さい）

(1-1) トータル海外滞在期間

1 週間未満  1 週間～1 か月未満  1 か月～半年未満  半年～1 年未満  1 年以上

(1-2) 海外滞在内訳（複数選択可）

パッケージツアー  個人旅行  ホームステイ  短期留学（1 年未満）  留学（1 年以上）

ゼミ旅行  スポーツ留学  家族の都合で居住  その他

Q2 海外に滞在して得られたことは何ですか（上位から最大 3 つ選択）

- 異文化, 異なる価値観 語学力 自国への客観的視点 チャレンジ精神  
友人・人脈 自信 将来の進路への方向性 観光を通じての知見 その他

Q3 あなたの在学中の海外滞在に関する質問です。

- (3-1) あなたは在学中に海外に滞在したいですか (したくない人は (3-4) から回答してください)  
滞在したい 滞在したくない
- (3-2) 海外滞在したい人はどんな滞在をしたいですか (上位から最大3つ選択)  
パッケージツアー 個人旅行 ホームステイ 短期留学 (1年未満) 留学 (1年以上)  
ゼミ旅行 スポーツ留学 インターン その他
- (3-3) 海外滞在したい理由は何ですか (上位から最大3つ選択)  
異文化, 異なる価値観 語学力 自国への客観的視点 チャレンジ精神  
友人・人脈 自信 将来の進路への方向性 海外の知見 観光を通じての知見 その他
- (3-4) 海外滞在したくない理由は何ですか (上位から最大3つ選択)  
費用がかかる 日本の学生生活が大事 海外に行ったことがないので不安  
語学力に自信がない 家族が反対 就職活動が心配 関心がない その他

Q4 東京オリンピックの決定で日本政府は2030年には日本の総人口の半分の6千万人の訪日観光客を目標としています。また、日本市場の縮小により日本企業の海外進出が加速され、グローバル化の波が押し寄せてきています。その中であなたが今、感じていることを選んでください。

- (4-1) あなたはグローバル化の流れの中にどちらかと言えば  
率先して飛び込んでいきたい じっくり時間をかけて検討してから行動に移したい
- (4-2) あなたはグローバル化の流れをどちらかと言えば  
良い機会ととらえ目標をもって行動したい 流れに取り残されないよう行動したい
- (4-3) あなたがとるグローバル化の対応はどちらかと言えば  
自分自身で判断して対応したい 周りからのアドバイスを尊重して判断をゆだねたい
- (4-4) あなたがとるグローバル化の対応はどちらかと言えば  
正しい手順に従い確実に対応する その場に応じて柔軟に選択肢を選んで対応する

Q5 グローバル化の流れの中で下記の3つの仕事の選択肢があります。もし3つの中で1つを選ぶとすればあなたはどの仕事を選びますか

- 日本にしながら訪日外国人に対応する仕事  
海外 (留学生は母国) に滞在しながら日本企業の海外進出をサポートする仕事  
日本にしながら海外 (留学生は母国) にいるビジネスパートナーと一緒に仕事

Q6 あなたの将来の仕事について

- (6-1) あなたは外国人の顧客またはビジネスパートナーと一緒に働きたいと思いませんか  
働きたいと思う どちらかといえば働きたいと思う  
どちらかといえば働きたいと思わない 働きたいと思わない
- (6-2) 上記で働きたいと思う人はその理由を選んでください (上位から最大3つ選択)  
自分を成長させたい グローバルな課題解決に貢献したい 日本を発展させたい  
日本に仕事がない 外国に住みたい (国名 ) その他
- (6-3) 上記で働きたいと思わない人はその理由を選んでください (上位から最大3つ選択)  
語学力に自信がない 外国人の上司や部下と働くことに抵抗感を感じる

- 文化が違うため 外国に行く可能性があるので心配 その他  
 (6-4) あなたの働きたい場所はどこですか (複数選択可)  
埼玉県内 東京都内 日本国内 海外 特にこだわらない

### 3.3 分析方法

以下の手順で分析を行なった。

- (1) 集計による調査結果の全体像の確認と分析対象の絞り込み
- (2) グラフ化による学生の心理パターンの分析
- (3) グローバル化へのモチベーションに関する質問の回答の数量化と標準化
- (4) 仮説モデルを検証するための統計的手法による仮説検定

## 4. 結果

### 4.1 集計による調査結果の全体像の確認と分析対象の絞り込み

質問紙による調査回答を集計した結果を表4から表9に示す。

表4 学生、性別、国籍の集計

	日	留	合計		日	留	合計		日	留	合計
1年生	145	9	154	女性	64	14	78	日本人	268	0	268
2年生	67	5	72	男性	204	18	222	留学生	0	32	32
3年生	38	9	47	合計	268	32	300	合計	268	32	300
4年生	18	9	27								
合計	268	32	300								

表5 これまでの海外滞在に関する集計

トータル海外滞在期間	日	留	海外滞在内訳(複数)	日	留	海外滞在で得られたこと(複数)	日	留
1週間未満	48	3	パッケージツアー	11	1	異文化、異なる価値観	61	15
1週間～1か月未満	36	0	個人旅行	29	6	語学力	15	16
1か月～半年未満	4	0	ホームステイ	12	0	自国への客観的視点	20	6
半年～1年未満	1	0	短期留学(1年未満)	5	1	チャレンジ精神	26	4
1年以上	6	27	留学(1年以上)	1	22	友人・人脈	17	7
合計	95	30	ゼミ旅行	5	1	自信	4	4
			スポーツ留学	4	2	将来の進路への方向性	8	15
			家族の都合で居住	6	3	観光を通じての知見	32	4
			その他	41	0	その他	9	2

表6 在学中の海外滞在に関する集計

海外滞在の希望	日	留	希望滞在の種類(複数)	日	留	滞在したい理由(複数)	日	留	海外滞在したくない理由(複数)	日	留
滞在したい	133	27	パッケージツアー	19	0	異文化、異なる価値観	69	15	費用がかかる	110	5
滞在したくない	130	2	個人旅行	82	13	語学力	69	10	日本の学生生活が大事	29	2
どちらでもない	5	3	ホームステイ	40	3	自国への客観的視点	14	3	海外に行ったことがないので不安	50	3
			短期留学(1年未満)	37	2	チャレンジ精神	49	9	語学力に自信がない	87	0
			留学(1年以上)	12	21	友人・人脈	24	3	家族が反対	5	2
			ゼミ旅行	16	1	自信	14	3	就職活動が心配	8	6
			スポーツ留学	26	0	将来の進路への方向性	32	15	関心がない	31	0
			インターン	6	3	海外の知見	18	8	その他	19	4
			その他	5	6	観光を通じての知見	29	5			
						その他	11	3			

表7 外国人の顧客またはビジネスパートナーと一緒に働くことに対する学生の心理パターンの集計

日本人+留学生	a	b	c	d	合計	日本人	a	b	c	d	合計	留学生	a	b	c	d	合計
主体行動	49	32	10	5	96	主体行動	35	29	10	5	79	主体行動	14	3	0	0	17
反映分析	31	67	74	32	204	反映分析	24	62	72	31	189	反映分析	7	5	2	1	15
目的志向	65	65	38	11	179	目的志向	46	58	36	10	150	目的志向	19	7	2	1	29
問題回避	15	33	46	26	120	問題回避	13	33	46	26	118	問題回避	2	0	0	0	2
内的基準	52	34	25	10	121	内的基準	42	30	25	10	107	内的基準	10	4	0	0	14
外的基準	28	65	59	27	179	外的基準	17	61	57	26	161	外的基準	11	4	2	1	18
プロセス	42	30	16	7	95	プロセス	28	25	16	7	76	プロセス	14	5	0	0	19
オプション	38	68	68	30	204	オプション	31	66	66	29	192	オプション	7	2	2	1	12

- a. 働きたい
- b. どちらかと言えば働きたい
- c. どちらかと言えば働きたくない
- d. 働きたくない

表8 将来の仕事に関する集計 (1)

グローバルな仕事の選択	日	留	外国人の顧客や仲間との仕事	日	留	外国人と働きたいを選んだ理由	日	留
日本で訪日顧客への対応	158	8	働きたい	59	21	自分を成長させたい	129	24
海外で日本企業をサポート	41	16	どちらかと言えば働きたい	91	8	グローバルな課題解決に貢献したい	52	9
日本で海外パートナーと一緒に	69	8	どちらかと言えば働きたくない	82	2	日本を発展させたい	36	4
合計	268	32	働きたくない	36	1	日本に仕事がない	3	1
			合計	268	32	外国に住みたい	21	3
						その他	12	7

表9 将来の仕事に関する集計 (2)

外国人と働きたくないを選んだ理由	日	留	働きたい場所	日	留
語学力に自信がない	119	6	埼玉県内	83	7
外国人の上司や部下に抵抗感	32	3	東京都内	108	13
文化が違うため	16	4	日本国内	109	8
外国に行く可能性があるので心配	34	4	海外	32	8
その他	20	3	特にこだわらない	49	4

表5より外国人留学生の大多数が自身にとっての海外である日本に1年以上滞在(留学)していることが、表6より今後も自身にとって海外である日本に滞在し続けることを望んでいることが、表8より海外で日本企業をサポートを希望して自身にとっての外国人である日本人と働くことを望んでいることが確認された。この傾向は日本人学生のもとは大きく異なるため、以降の分析対象を日本人学生だけに絞らなければならない。

#### 4.2 グラフ化による学生の心理パターンの分析

表7は学生の本研究の調査・分析の基本モデルに規定したグローバル化に対するモチベーションの定義である「将来の仕事について外国人の顧客またはビジネスパートナーと一緒に働きたいという」学生の気持ちの強さが、LAB Profileにより分類された学生の心が持つ4つのカテゴリー(主体性、方向性、判断基準、選択理由)が持つ8つのパターン(主体行動型×反映分析型、目的志向型×問題回避型、内的基準型×外的基準型、オプション型×プロセス型)とどのように関係しているかを表している。

表2でたてた仮説H0~H7について統計的な検証を行うにあたり、前もって学生の「グローバル化に対するモチベーション」と「学生の心理パターン」の関係をグラフによって確認を行う。表7の集計結果をグラフ化したものを図6に示す。



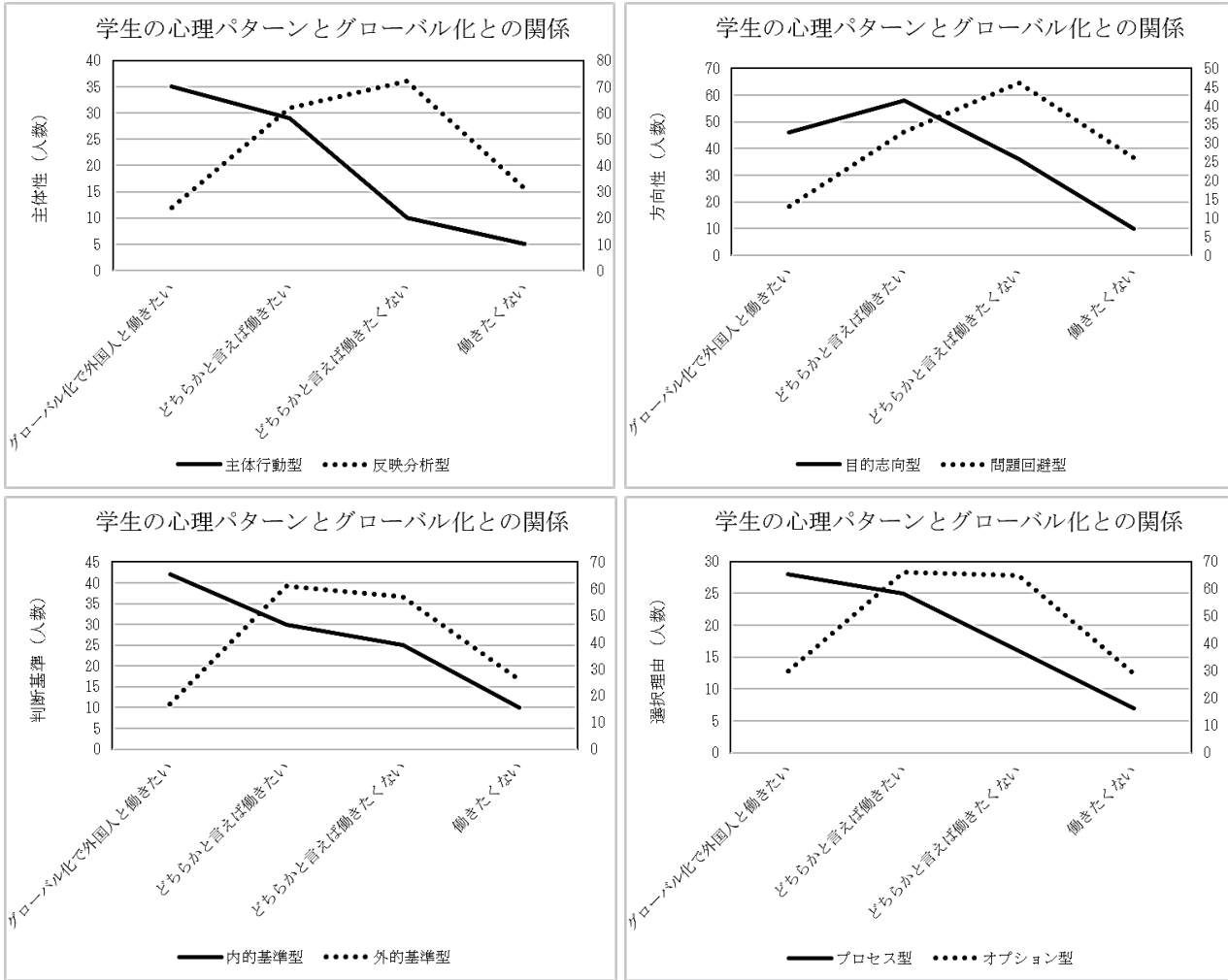


図6 学生の心理パターン

#### 4.3 グローバル化へのモチベーションに関する質問の回答の数量化と標準化

グローバル化へのモチベーションに関する質問 (6-1) 「あなたの将来の仕事についてあなたは外国人の顧客またはビジネスパートナーと一緒に働きたいと思いますか？」に対する回答の選択肢を作成するにあたり、リッカート尺度 (Likert scales) に類似した方法を用いられた。経験に照らして、「どちらともいえない」という選択肢に学生の回答が集中することを避けるために本調査ではこのリッカート尺度にある選択肢を省いた。

質問の回答の数量化を行うにあたり、「働きたいと思う (+2), どちらかといえば働きたいと思う (+1), どちらかといえば働きたいと思わない (-1), 働きたいと思わない (-2)」のように数量化し、データの平均が0, 標準偏差が1になるように標準化を行なった。

#### 4.4 仮説モデルを検証するための統計的手法による仮説検定

外国人と働きたいというモチベーション数量に対し、表2の仮説に対し表10, 11の検定結果をまとめた。検定のプロセスについては仮説 H0, H1 を例として以下に示す。

##### (1) F-検定：2標本を使った分散の検定

- ・対立仮説：主体行動型と反映分析型の分散に違いがある。
- ・帰無仮説：主体行動型と反映分析型の分散に違いはない。(=等しい)

P値 (両側) = 0.330454 > 0.05 (有意水準) よって帰無仮説 (分散は等しい) を棄却できない。

よって「主体行動型と反映分析型の分散に違いはない。(=等しい)」

(2) t検定：等分散を仮定した2標本による検定

- ・対立仮説 H0：主体行動型と反映分析型のモチベーションに違いがある。
- ・帰無仮説 H1：主体行動型と反映分析型のモチベーションに違いはない。(=等しい)

P値(両側) = 1.09E-09 < 0.05 (有意水準) よって帰無仮説 H0 (分散は等しい) を棄却して対立仮説 H1 を採択する。よって「主体行動型と反映分析型のモチベーションに違いがある」。

仮説2～6についても仮説1と同様なプロセスに従い、検定を実施した。仮説7に関しては表11の実測度数からカイ二乗値 = 1.54, 自由度1の境界値 = 3.84, P値 = 0.22を算出し, P値 = 0.22 > 0.05 (有意水準) により仮説7は棄却され, 「過去の海外滞在経験と在学中の海外滞在の希望との間には関係性はない」という結論になった。

表10 検定結果

仮説	カテゴリー	パターン	観測数	平均	分散	F検定 [P値:両側]	t検定 [t値]	t検定 [P値:両側]	t検定結果 P < 0.05
H0	主体性	主体行動型	79	0.56	0.76	等分散 [0.33]	[6.32]	[1.09E-09]	H1は棄却 H0は採択
H1		反映分析型	189	-0.23	0.92				
H2	方向性	目的志向型	150	0.30	0.86	等分散 [0.61]	[5.78]	[2.05E-08]	H3は棄却 H2は採択
H3		問題回避型	118	-0.38	0.94				
H4	判断基準	内的基準型	107	0.31	1.02	等分散 [0.44]	[4.25]	[2.98E-05]	H5は棄却 H4は採択
H5		外的基準型	161	-0.21	0.89				
H6	選択理由	プロセス型	76	0.33	0.97	等分散 [0.96]	[3.44]	[0.000685]	H7は棄却 H6は採択
H7		オプション型	192	-0.13	0.96				
H8	海外経験	海外経験者	95	0.16	0.94	等分散 [0.68]	[1.93]	[0.05371]	H9は採択 H8は棄却
H9		未経験者	173	-0.09	1.02				
H10	在学中に 海外滞在の	希望者	133	0.42	0.78	等分散 [0.43]	[7.40]	[1.80E-12]	H11は棄却 H10は採択
H11		非希望者	135	-0.41	0.89				

表11 仮説7のカイ二乗検定のための実測度

	在学中の海外滞在の		
	希望者	非希望者	合計
海外滞在経験者	52	43	95
海外滞在未経験者	81	92	173
合計	133	135	268

5. 考察

5.1 モチベーションに影響を与える人の属性に関する考察

日本人学生の150名(約56%)が将来の仕事について外国人の顧客またはビジネスパートナーと一緒に働きたいというグローバル化へのモチベーションを持ち(表8), 日本人学生の133名(約50%)が在学中の海外滞在を希望していること(表6)がわかった。日本人学生が持つ人の属性については主体性, 方向性, 判断基準, 選択理由の4つカテゴリーがグローバル化へのモチベーションに影響を与えていることがわかった(図6, 表2, 表10)。そして, 高いモチベーションを持つ日本人学生は各カテゴリーにおいて「主体的に行動する主体行動型」, 「目的を達成することに重きを置く目的志向型」, 「自分の中に判断基準があり自分で決定する内的基準型」, 「プロセスやスケジュールに従って行動するプロセス型」というパターンを持つことがわかった(図6, 表2, 表10)。

外国人留学生の中では日本人学生に比べて目的志向型が非常に多く, 計画的(プロセス型)であり, 主体

行動的であった。また、外国人留学生は将来の仕事について外国人の顧客またはビジネスパートナーと一緒に働きたいというグローバル化への高いモチベーションを持つ傾向にあることがわかった（表8）。

## 5.2 モチベーションに影響を与える要因に関する考察

日本人学生の過去の海外経験の有無は「在学中の海外滞在の希望との間に関係性がないこと」と「グローバル化へのモチベーションにも影響を与えないこと」が統計的に確認された（表2, 表10, 表11）。一方、在学中の海外滞在をしたい日本人学生はグローバル化への高いモチベーションを持つ傾向があった（表2, 表10）。グローバル化へのモチベーションを高める理由として海外滞在を希望する日本人学生は「異文化, 異なる価値観」, 「語学力」, 「チャレンジ精神」, 「将来の進路への方向性」などの要因を挙げ、希望する滞在の種類としては「個人旅行」, 「ホームステイ」, 「短期留学（1年未満）」, 「スポーツ留学」などの要因を挙げた（表6）。日本人学生がグローバル化への低いモチベーションと関係性のある「海外滞在をしたくない」を選んだ日本人学生の主な理由としては「費用がかかる」, 「語学力に自信がない」, 「海外に行ったことがないので不安」が挙げられた（表6）。

将来の仕事について外国人と一緒に働きたい気持ちにつながる要因は「自分を成長させたい」, 「グローバルな課題解決に貢献したい」, 「日本を発展させたい」であった。それに対して、外国人と一緒に働きたい気持ちにつながる要因は「語学力に自信がない」が圧倒的に多く、続いて「外国に行く可能性があるので心配」, 「外国人の上司や部下と働くことに抵抗感を感じる」などが上位を占めた（表8）。

## 5.3 モチベーションを高める大学システム設計に関する考察

グローバル化へのモチベーションを高める人の属性について、本研究では4つのカテゴリー（主体性, 方向性, 判断基準, 選択理由）における4つのパターン（主体行動型, 内的基準型, 目的志向型, プロセス型）が統計的に有意であることが確認されたが、各パターンにあった教育方法として学生自らが主体的に自分の判断で学びを深める「アクティブ・ラーニングスタイル」（主体行動型, 内的基準型）やゴールを設定し、計画的に行動を進める「コーチング・スタイル」（目的志向型, プロセス型）などをベースにカリキュラムのシステムを設計していくことがグローバル化へのモチベーションを高める観点から有効であると考えられる。

また、在学中の海外滞在をしたい日本人学生とグローバル化へのモチベーションの関係も統計的に有意であったことから、グローバル化へのモチベーションを満たす海外滞在プログラムの提供も有効である。「ホームステイ」, 「短期留学（1年未満）」, 「スポーツ留学」などの海外滞在プログラムや学生が求めている「異文化, 異なる価値観」, 「語学力」, 「チャレンジ精神」, 「将来の進路への方向性」などに応えるコンテンツの強化により、学生のグローバル化へのモチベーションをさらに高めることが可能となる。

一方、在学中に海外滞在をしたくない理由（表6）として上位に挙げた「費用がかかる」に対しては奨学金制度（日本学生支援機構 JASSO の給付型など）や留学促進キャンペーン（文部科学省のトビタテ！留学 JAPAN）などの活用の検討や、「語学力に自信がない」ならびに「海外に行ったことがないので不安」に対しては TOEIC や IELTS 対策、海外滞在プログラム、国際交流イベント、留学生との共生の浸透などを大学システムに組み入れる選択肢などがある。

2017年11月6日の日本経済新聞によると少子化で18歳人口が減り、私大の約4割が定員割れという状況の中で、大学間の競争が激化しており、全員留学制などを導入することで、国際的な人材の育成に強いといった特色を狙う大学が相次いでいる（表12）。留学の中でも増えているのが短期留学であり、現地の大学で単位を取るところまではいかないが、数カ月滞在し語学力を磨く。日本学生支援機構 JASSO の調べによると、海外留学者数は、2015年度までの5年間で2倍以上に増えており、約6割が1カ月未満である（図7）。ベネッセ教育総合研究所の調査によると留学を希望しない学生の約5割がその理由として、「経済的に難しい」をあげており、一橋大学は、来年度までに1年生全員を短期留学させる制度の導入をめざしていたが、学生の経費負担が重いことで、大学の補助を増やし、できるだけ多く派遣できるよう努めている（表12）。

表12 留学を必修にする学部や学科設立に向けた大学の事例

大学名	事例内容
近畿大学国際学部	2016年から1年生全員が米国などで学ぶ制度を始めた。現地の大学が併設する語学学校で集中的に英語を学ぶ仕組みで、すでに、約530人が帰国。英語能力テストの成績が大幅に伸びるなど成果を上げている。
帝京大学外国語学部	2017年、新入生全員が留学する制度を始めた。2018年の秋、同学部の約300人全員が海外の提携校や語学学校で学ぶ予定で、準備を進めている。
武蔵野大学 グローバル・コミュニケーション学科	2018年の春に入学する約150人全員が、2年生で米国に行く予定。
立教大学	留学必修の異文化コミュニケーション学部などに加え、2024年度までに学生全員が海外経験ができるよう計画を進めている。
一橋大学	来年度までに1年生全員を短期留学させる制度の導入をめざしていたが、断念した。学生の経費負担が重いため、「大学の補助を増やし、できるだけ多く派遣できるよう努めている」(広報室)

(2017年11月06日、日本経済新聞をもとに筆者が加筆修正)

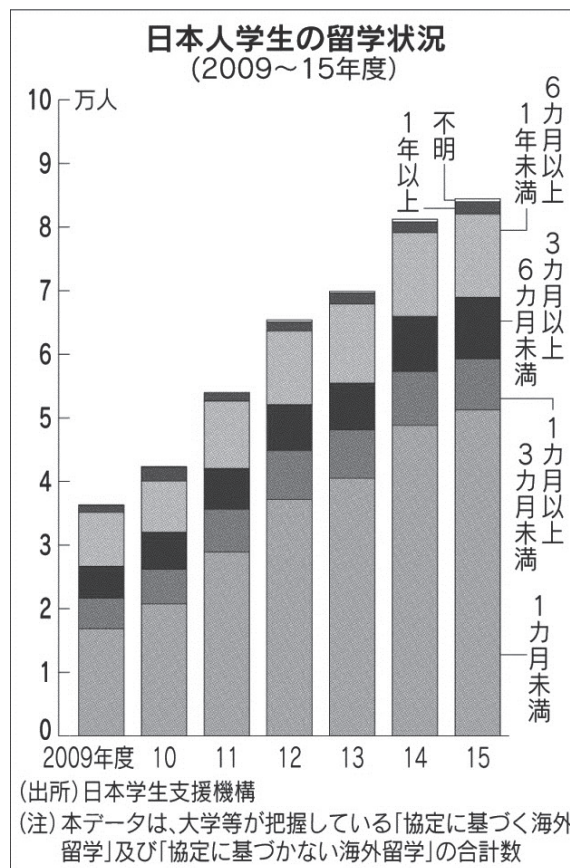


図7 日本人学生の留学状況

これらの事象は本研究の考察から類推しうることであり、本研究の仮説の信憑性に寄与していることがわかる。

#### 5.4 今後の課題

本研究では図5の調査・分析の基本モデルを用いて、主にグローバル化へのモチベーション、人の属性、要因の関係性について調査、分析、考察を行ってきた。今後の課題は今回の研究で踏み込めなかったモチベーションと行動の関係性についての知見を得ることである。具体的にはモチベーションが学生の進路や就職に実際にどのような影響を与えたか、今回の研究を先行業績として、学生の就職後の業務内容などをトレースしながら、モチベーションと行動(就職)の関係性を継続的に研究することが必要となる。モチベーションと行動(就職)の新たな知見をベースに大学がどのようにシステム設計をしていくかについての考察することも今後の課題となる。

また、本研究の調査・分析の基本モデルはLAB Profileの4つのカテゴリー(主体性、方向性、判断基準、選択理由)が人の属性とモチベーションの間に介在する仮説を立てたが、他のカテゴリーも含めて、モチベーションに影響を与える人の属性の構造を因子分析や主成分分析などを用いて研究していくことも課題である。

#### 謝辞

本研究を進めるにあたり、調査対象への調査に快くご協力頂いた共栄大学国際経営学部の石塚勝美先生と田蔵奈緒先生、そして調査対象となった共栄大学国際経営学部の学生に対し、ここに謝意を表す。

## 引用文献

- 日本政府観光局, “訪日外客数 (2017年12月および年間推計値)”, 入手先 <[https://www.jnto.go.jp/jpn/news/press\\_releases/pdf/180116\\_monthly.pdf](https://www.jnto.go.jp/jpn/news/press_releases/pdf/180116_monthly.pdf)>, (参照: 2018-01-16)
- 国土交通省, “明日の日本を支える観光ビジョン”, 入手先 <<http://www.mlit.go.jp/common/001126601.pdf>>, (参照: 2017-10-22)
- Likert, R. *New Patterns of Management*, New York, McGraw-Hill, 1961
- George H. Litwin and Robert A. Stringer Jr. *Motivation and Organizational Climate*, Boston, Harvard University Press, 1968
- 西田耕三, 『ワーク・モチベーション研究—現状と課題』, 東京, 白桃書房, 1976, pp. 51-83
- ロジャー・R. ペアマン, サラ・C. アルブリット, 『MBTIへのいざない—ユングの「タイプ論」の日常への応用』, 東京, JPP, 2012, pp. 6-69
- シェリー・ローズ・シャーベイ 『「影響言語」で人を動かす』, 東京, 実務教育出版, 2010, pp. 28-173
- Godin, E. and Sirois, M, *Inter-judge reliability in 84 LAB Profile interviews*, Manuscript, Universite de Moncton, Moncton, NB., Canada 1995
- Cohen, J, *A Coefficient of Agreement for Nominal Scales*, Educational and Psychological Measurement, 20(1), 1960, pp. 37-46.
- 長谷川芳典, “スキナー以後の行動分析学—3-S-R条件づけ理論との混同”, 『岡山大学文学部紀要 (20)』, 1993, p. 65-73
- 望月昭, 行動分析学特論 (2), 立命館大学, 2011, 入手先 <[www.psy.ritsume.ac.jp/~mochi/11BA2.PPT](http://www.psy.ritsume.ac.jp/~mochi/11BA2.PPT)>, (参照: 2017-10-22)
- 日経新聞電子版, “留学のススメ 大学, 国や企業も後押し”, 2017-11-06, 入手先 <[http://berd.benesse.jp/up\\_images/research/3\\_daigaku-gakushu-seikatsu\\_all.pdf](http://berd.benesse.jp/up_images/research/3_daigaku-gakushu-seikatsu_all.pdf)>, (参照: 2017-11-06)
- ベネッセ教育総合研究所, “大学生の学習・生活に関する意識・実態調査”, 入手先 <[http://berd.benesse.jp/up\\_images/research/3\\_daigaku-gakushu-seikatsu\\_all.pdf](http://berd.benesse.jp/up_images/research/3_daigaku-gakushu-seikatsu_all.pdf)>, (参照: 2017-11-06)
- 日本学生支援機構 (JASSO), “協定等に基づく日本人学生留学状況調査”, 入手先 <[http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_s/index.html](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/index.html)>, (参照: 2017-11-06)

